

## 「ぶっとびファンド」とは何だったのか —審査員のコメントによる、一応の締めくくり—

「ぶっとびファンド」は、「アートで人とまちをシェアに」する活動を応援する、アートサポートふくおか独自の助成制度です。2019年に開始、2021年度までに4回の募集・審査を実施、延べ40団体に支援を行い終了しました。

「ぶっとびファンド」の最大の特徴は、応募の際に申請書のようなペーパーが一切いないことでした。応募の意思表示を伝えたのち（1次審査）、プレゼンテーションでその熱意を伝えてもらい（2次審査）、4人の審査員たちが心を動かされたら10万円を支援する、いわば投げ銭のような助成制度でした。助成事業は報告会で報告してもらうことが必須、でも「報告書」「領収書」を提出してもらう必要はありません。予定通りに実施できていなくてもOK……従来の助成制度からみると、まさに「ぶっとんだ」支援制度だったと思います。

2023年1月に4回目の助成事業報告会を実施し、区切りをつけた「ぶっとびファンド」。これはいったい何だったのか！？を振り返るコメントを審査員から寄せていただきました。

\*\*\*\*\*

文化生態観察  
大澤 寅雄

古賀弥生さんから聞いたのは、どこかの会議で一緒に帰りの電車の中だったと思います。

「兵庫県の新設の大学に着任するために福岡を離れちゃうから、アートサポートふくおかの活動に区切りをつけたいんですよ。でね、団体の繰越金があって、それを助成金という形で3年で使い切っちゃおうと。私は助成の申請も審査もしてきたけど、なんでこんな制度なの？っていつも思ってきたから、自分で納得のいく制度を作っちゃえ！って」。

いいですねえ！喜んで協力します！と伝えてからしばらくして、古賀さんが考える助成制度の案を聞きました。申請に書類はいらない。「思い」を語ってほしい。計画通りできなくてもいい。前払いもする。報告書も証憑書類も求めない……などなど、通常の助成金で求められるルールはほとんどなく、求めるのは「アートで人とまちをシェアにする」という成果だけ。「すげえ！ぶっとんでる！」としか言えず、こうして助成制度の名称は「ぶっとびファンド」に決定。

その後、公開での審査会と報告会を各4回で計8回。審査会では毎回、申請者の熱い思い

を受け止めつつも、この企画は「アートで人とまちをしあわせにする」んだろうか？と考えます。アートってなに？人ってだれ？まちってどこ？しあわせってなに？と問いはブーメランのように私に帰ってきます。一方の報告会では、活動の成果だけでなく、苦労や失敗などを団体間で共有できたことが嬉しかったし、審査会や報告会での出会いや交流が、協働や連携、新しい活動の展開に繋がったことも、思わぬ波及効果でした。

当初の予定通り財源を使い切る形で終了し、いま、振り返りの原稿を書きながら、これほど「ぶっとんだ」助成制度は後にも先にも現れないかも……と書こうと思った瞬間、遠く離れた古賀さんの声が私の脳内に響きました。「そんなこと言ってたら、いつまでも助成制度は変わらないじゃないの！納得のいくように制度を変えたり作ったりしなさいよ！」と。

古賀さん、ありがとうございました。ってなんかお別れの言葉みたいだな（笑）。お別れじゃなくてスタートですね。これからもよろしくお願いします。

\*\*\*\*\*

九州大学大学院芸術工学研究院  
准教授 長津 結一郎

ぶっとびファンドとともに休止したアートサポートふくおかの活動は、福岡で暮らすアート関係者として、いろいろな側面で意義を感じるものでした。

まず、アートマネジメントの側面から。今回のぶっとびファンドの構想から実現までのプロセスを並走させていただくなかでつくづく感じたのは、アートサポートふくおかは、代表である古賀弥生さんの心の底からの問題意識とともにあったことが重要だったのだなということです。活動のパートナーは子ども、高齢者、文化施設、大学とさまざまでしたが、そのすべてに対して、あってほしい未来を描き、その未来の風景が少しだけでも実現するように全速力で走ることを、アートサポートふくおかは続けてこられたんだなと感じました。熱意を持ちつつ、その場にあわせた適正な規模の伴走をいかに行うか、というバランス感覚を、今回の取り組みを通じて学ばせてもらったように思います。

つぎに、助成金としての側面から。今回の「ぶっとびファンド」の出発点は、ちまたの助成金審査にまつわる書類の多さと、そのわりにフィードバックもなく、申請者に手応えがないという現状にありました。企画が生まれたのはまだコロナ前だったと思いますが、その後コロナ禍に伴い、さまざまな支援制度が設けられたことにより、書類仕事をめぐる問題もますます社会的に顕在化したと思います。申請書なし、報告書なしというぶっとびファンドの実験は、このような状況に一石を投じたと私としては思っています。

助成金も本来は「与える／与えられる」というものではなく、共創的なものなのではないか、ということ投げかけたのです。それならばコミュニケーションのあり方はもっと多様

でいい、と。その斬新さは同時に、それでも行わなければならない「審査」というプロセスに悩ましさを生み出しました。

最後に、アート活動に対してどのように支援をすべきなのかという側面から。ぶっとびファン드는申請書も報告書もない、となれば、求められるのは「信頼」だったように振り返っています。すぐに種が実らなくてもいいかもしれないものを、辛抱強く伴走することで、いつか別の形で花が咲くかもしれない。思えばそのようなことを、全国のアートマネジメントの担い手たちはあちこちで続けてきたのだと思います。

ある支援対象となった活動の後日談を耳にしました。アートも体験できる駄菓子屋を開きたい、というあるひとりの申請者の方。申請期間中には、駄菓子を販売するための自転車を購入するところまでしか活動ができていなかったように記憶をしています（報告会も若干議論を巻き起こした記憶が…）。しかしその後も辛抱強く活動を続けたその方は、不定期ながら駄菓子屋をオープンさせ、いまでは地域の30名ほどの「常連」を抱えていると聞きます。時にはトラブルが起こったり、悩みを抱える子どもが訪れたり、地域の公園でひとりぼっちでいる子どもを見つけたりするそうです。その時のことを、SNSに次のように投稿されていました。

「親でもないただの駄菓子屋のおばちゃんにできることは、そこにて話を聞いてあげることくらいですが、力になってあげられることがあるかもしれません。また、来て欲しいです。待ってます。」 <https://www.facebook.com/itookashiyasan>

そこにて話を聞くこと。力になれるかもしれないことを一緒に考えること。そして、また会いたい、また一緒に何かしたいと願うこと。そういう伴走のあり方が、まさにぶっとびファン드의プロセスそのものだったのではないかな、と今あらためて振り返っています。

\*\*\*\*\*

特定非営利活動法人ふくおか NPO センター  
代表 古賀 桃子

ぶっとびファンドを通じて、「アート」および「資金的支援」のそれぞれにおいて気づきや問題意識の深まりを得ました。

「アート」については、演劇や音楽等を通じ、主体と客体の立場が融和し、自ら演じながら自らを客観視したり、他人事と認識されがちなのが自分事に転じたりといった現象が生まれやすいことを改めて実感しました。五感を経由して感性に働きかけるアートならではの、100の言葉を並べても理解されがたいことも、アートを介せば一足飛びで感受できます。心や立場の垣根をたちまち容易に低くし得るアートの力に改めて圧倒されました。

それから「資金的支援」について、今回は「投げ銭」的な手法で運用されましたが、原点に立ち戻ったり新たな仲間を求めたりなど、通常の助成事業では見出せないような境地に到っているケースもみられました。回を重ねるうちに横連携を望むマインドも見て取れるようになり、主催者であるアートサポートふくおかの企図を超えた展開もみられたのではないかと感じています。このプロセスでは、何より「アート」の力が大きく作用しているはずで、当事者とか第三者とかの立場を行き来しながら関係性を広げたり深めたりする中で、このような流れになっていったのだらうと勝手ながら推測します。

かたや目下「ロジックモデル」や「社会的インパクト評価」といった成果主義ともいうべき風潮が主流となっていて、いつの間にかこうした思考に慣れきってしまった自分の中には「もやもや」感も否めないところです。多額のお金を投じる通常の助成事業をもってしても到達できない境地にこのファンドが踏み込んでいる点から生じた「もやもや」で、未だに要因を考察しきれていません。

ともあれ、「ぶっとび」ぶりを確固たるものにしてきたのは、何よりアートの力であり、アーティストやアーティストの活躍の場を大切にされる関係者の皆さんの存在でしょう。暗いニュースが多い時勢だけに、益々伸びやかに、大いにぶっとんでいただきたいと切に願います。

\*\*\*\*\*

アートサポートふくおか  
代表 古賀 弥生

大澤さんが書いてくださっているように、「ぶっとびファンド」は20年にわたるアートサポートふくおかの、団体としての活動に区切りをつけることをきっかけに生まれたものです。というわけで、あえて法人格を持たず任意団体のまま20年間活動が続けた福岡の零細弱小NPO・アートサポートふくおかの来し方と、「ぶっとびファンド」の振り返りは重ね合わせて考えざるを得ません。

あらためてウチのHPを見ると、設立趣旨として「わたしたちは芸術文化と社会の間をとりもつ役割を負うとともに、芸術NPOの活動を支援することによって真に豊かな社会を実現する中間支援組織です。」と高らかにうたっていて、自分で書いた文章のはずだけど面はゆい限りです。団体として活動してきた20年間に、この志をどこまで「実現」できたのかなあ…。

私にできることは多くはありませんでしたが、この想いを多くのアート関係者に渡し、広げていただくための「ぶっとびファンド」だったと思います。

2021年6月に行った「ぶっとびファンド中間振り返り座談会」で、私はこんな発言をしています。<https://www.as-fuk.com/20210622buttobifurikaeri2.pdf>

「ぶっとびではさまざまな分野で独自に育ちあがって来られた方々とのつながりがで

きましたが、たんぽぽの綿毛が一気に飛んで根づくように、アートサポートふくおかのスピリットみたいなものをちょこっとずつ皆さんに分け持っていてあっちこちに飛んでいくイメージが私の中にはあります。」

綿毛が根付いて芽を出し成長するスピードはさまざま。4回の審査でサポートさせていただいた延べ40団体みなさんが、このあとも各地・各領域で活動を展開され、互いにカラミ合ったり合わなかったりしながら何かが生まれる様子をずっと見守りたい心持ちです。そしていつか、私自身もそのカラミに身を投じる日が来るかも…と思うと楽しみでなりません。

大澤さん、長津さん、桃子さんが書いてくださった、「ここからスタート・悩ましき・もやもや」を抱え、まだやるべきことがある、と思いながら団体としての活動に区切りを付けられるなんて、ああ、しあわせ。またね、福岡！